

# 『ラモーの甥』における ディオゲネスとソクラテスをめぐって

長谷川 蔵人

## 序

ディドロの『ラモーの甥』（1760年代前半から執筆開始と推定）の中で交わされる対話で話題に上がる様々な主題を捉えるうえで、作品に登場する二つの固有名詞を基軸にすえて作品全体にわたる包括的な視座を得ることを本研究の目的とする<sup>1</sup>。作品の序盤からすぐに話題に上がるディオゲネスとソクラテスであるが、この二人の古代ギリシアの哲学者が、啓蒙主義哲学者であるディドロの思考を通して『ラモーの甥』に現れるまでの変容の過程に、この作品を読み解く中心的な問題系が隠されている。古代哲学者の道德思想を受け継ぎながらも、それと一見相容れることがないような十八世紀フランスの唯物論の思想が混ざり合い、『ラモーの甥』の中に現れているのである。そこには伝統的なディオゲネス像、ソクラテス像の継承と転倒がみられる。しかしそれはいかなる転倒であるのか。彼らの主張する肯定的概念を否定的にし、否定的な概念を肯定的にするという、単純にプラスとマイナスをいれかえただけの転倒であろうか。そうではない。十八世紀フランスの文脈に移された古代の哲学者は複雑な変容を被って『ラモーの甥』へと受け継がれるのであり、それを読み解くには詳細にテキスト自体を検討していかなければならない。その過程で、形而上学的な思弁に対して実践を唱えたディオゲネスと、魂の永遠性を唱えたソクラテスという二つの固有名詞がディドロの唯物論思想と相互に作用し合って『ラモーの甥』の中で一つの中心として収斂していく様が明らかとなるだろう。『百科全書』の中の項目である、ディドロが執筆した「犬儒派」や「ソクラテス派」などと『ラモーの甥』との比較を通じて論じる。

---

<sup>1</sup> ディドロの著作は *Œuvres Complètes*, éd. Herbert Dieckmann, Jacques Proust, Jean Varloot et al., Paris, Hermann, 1975-. (以降 DPV と略記する) から引用する。

## ディオゲネス

まずディオゲネスについて、作品冒頭で哲学者に髭を剃ったことについて尋ねられたラモーの発言の中に多くの重要な論点が含まれている。髭さえ剃らなければ、ラモーは立派な賢者に見えるのであり、青銅か大理石の像であっても遜色がない。哲学者によれば「カエサル、マルクス・アウレリウス、ソクラテス<sup>2</sup>」の像の隣においてもよいほどである。しかしラモーはそれを否定し、むしろ自分はディオゲネスと娼婦フリユネの間にいるべきだと言う。

いいえ、私はディオゲネスとフリユネの間のほうがよいでしょう。私は彼のように厚かましいですし、彼女たちのところにも進んで通います<sup>3</sup>。

このようにラモー自身が自分とディオゲネスとの類縁性を主張している。ここではディオゲネスとの性格的な類似性が持ち出されているわけであるが、ディドロがラモーに施した人物造形を検討していくならば、類似性は性格のみに限られたものではないことが明らかとなるだろう。そのためにはまずラモーの道徳的な態度を確認するべきである。

ラモーの道徳を一言で要約するならば、ただ自然的欲求にのみ従うということになる。そこには一切の抽象的道徳概念が入り込む余地がない。ひたすら具体性だけがラモーにとっては重要である。自然に従うことを第一の道徳原則としたのはディオゲネスと共通である。ディドロは『百科全書』の項目で「犬儒派」を執筆し、ディオゲネスの主張を次のように要約している。

全ては実践によって獲得される。徳すらも例外ではない。しかし人々は幸福とは反対の行為に従事し、みずからを不幸にするように働いてきた。なぜならば彼らは自然に適っていないからだ<sup>4</sup>。

ディオゲネスのようにラモーは幸福を自然に求めるのである。それは行為とかかわる事柄であり、なんら概念的なものではないのである。だから抽象的道徳を云々する人々をディオゲネスは嘲笑している。

徳を教え、徳を賞讃しながら、実践を怠ることは狂気の極みである<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> *Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, p. 75.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 75.

<sup>4</sup> L'article «CYNIQUE» de l'*Encyclopédie*, DPV, t. VI, p. 540.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 541.

このように徳という概念が先行し、具体的な行為を伴っていないという事態をディオゲネスは批判しているということがディドロによる説明に現れている。このような主張はラモーの口を通して同様に表明されている。

同一の幸福が万人のためにつくられているとあなたがたは考えている。なんて奇妙な空想でしょう！ 人が所有していない空想的な精神の働き、奇妙な魂、特別な趣味というものをあなたがたの言う幸福というものは仮定してしまっている。この奇妙なものをあなたがたは徳という名で飾り立て、それを哲学だとあなたがたは呼んでいるのです。しかし徳とか哲学とかは万人のために作られているのでしょうか。持つことができる人だけ持つのです。保存することができる人だけが保存するのです<sup>6</sup>。

この引用から明らかなように、ラモーは哲学者たちが徳と呼ぶものを奇妙な空想として、その普遍的価値を疑問に付している。ラモーにとっては徳というものは実践することと不可分であり、ディオゲネスについてディドロが書いていたことと合致していることが分かる。

しかしラモーがディオゲネスと類似した人間観、自然観を持っていたとしても、実際には大きな違いがある。なぜならばディオゲネスは上のような考えに基づいて独立して生きてゆくのにに対し、ラモーはその反対に金満家に上手くとりいり、そのおこぼれをいただいて自然的欲求を満たそうとするのだから。そのために、作品の末尾では哲学者のほうがディオゲネスの道徳を賞讃することになり、ラモーはその道徳になじめないということになる。ディオゲネスが考えるおべっか使いは、その表現からみても、まさにラモーのことを言い当てているようである。

中傷家は猛獣の中で最も残酷であり、おべっか使いは飼われた動物の中で最も危険である<sup>7</sup>。

ここで使われている動物の比喻に注目することができる。ベルタンのもとに集まる寄生者たちを、自分を含めてラモーが動物に例えていたように、ディオゲネスも動物に例えておべっか使いを定義している。このような動物の比喻によってディオゲネスが批判するおべっか使いとラモーが近いものであることが分かる。ラモーの発言から引用する。

---

<sup>6</sup> *Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, p. 114.

<sup>7</sup> L'article «CYNIQUE» de l'*Encyclopédie*, DPV, t. VI, p. 541.

長い間雪で大地が覆われていたら、我々は狼のように貪り食います。成功したものは全て虎のように引き裂きます。ときどきペルタン、モンソージュ、ヴィルモリアンなどの群衆が集まると、動物小屋にさわぎが起こります。これほど多くの陰険で、気難しく、悪意があり、怒り狂った獣たちが集まっているのが見られたことはありません<sup>8</sup>。

これらのディオゲネスとの比較からわかるように、ディオゲネスを範としながらも、その考えに微妙な変更を加えながらディドロはラモーを描いていると言えるだろう。そして作品の最後の場面ではディオゲネスの哲学を代弁するのはラモーではなく、哲学者の「私」となっている。

私 [...] しかしながら、パントマイムを免れている者が一人います。何も持たず、何も必要としない哲学者です。

彼 そんな動物がどこにいるのです？ もし何も持っていなかったら、苦しむでしょう。もし何も懇願しないなら、何も手に入りません。いつでも苦しむことになるでしょう。

私 ちがいます。ディオゲネスは欲望を嘲笑いましたよ<sup>9</sup>。

このあとも哲学者の「私」はラモーの反論に対してディオゲネスの言行を例にとってやり返していく。果たしてこの変化のよってきたる所以とは何であらうか。それを明らかにするために、ラモーが自分はソクラテスではなくディオゲネスの隣にいるほうがふさわしいと言っていたことに基づいて、ソクラテスとの比較によって論を進めてゆくことは正当性を持つと言えるだろう。

## ソクラテス

このように転倒された人物像の継承という点で、上で述べたことの帰結として、もう一つ例を挙げるべきなのがソクラテスである。ラモーの発言にはソクラテスの言行の意図的ともいえる転倒がみられる。『ラモーの甥』におけるディオゲネスとソクラテスの転倒の共通の原因を探ることによってのみ二つの転倒の真意が明らかにされるとも言えるだろう。

---

<sup>8</sup> *Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, p. 134.

<sup>9</sup> *Ibid.*, pp. 191-192.

ソクラテスは様々な永遠的な概念について話す。そのような概念とは魂の不死や、善の普遍性や、肉親への愛などである。ラモーはこれらの概念をことごとく転倒していく。これらの全てをなんら現実性がない空言とみなすのである。しかしディオゲネスの場合と同様、継承しながらでしか転倒はできないことに注意しなければならない。

『ラモーの甥』の執筆当時のディドロは、1758年までに二つの戯曲作品を上演させていたが、その評判はあまり芳しいものではなかった。そして次なる戯曲の題材として「ソクラテスの死」を用意していたのであった。しかしこれを完成させることはなかった。ソクラテスをめぐるとこのような経緯が『ラモーの甥』にも影響していることが指摘されている<sup>10</sup>。

そもそも伝記的事実として、ディドロは若いころからプラトンの著作に親しみ<sup>11</sup>、1749年にヴァンセンヌに投獄されていた際に、プラトンの『ソクラテスの弁明』をギリシア語からフランス語に翻訳していた<sup>12</sup>。自分の境遇をソクラテスに重ね合わせていたともいえよう。これは自他共に認めることであり、同時代人としてはヴォルテールが1766年の書簡の中で『百科全書』が迫害にあっている際に国外に亡命することを勧めながらディドロに「ソクラテス」と呼びかけている<sup>13</sup>。

ここではディドロが『ラモーの甥』を執筆した動機などには立ち入らず、ソクラテスとの重要な違いにだけ焦点をしばる。

まず形式的な類似が指摘できる。対話作品である『ラモーの甥』とソクラテスの問答は形式的に通じるものがある。このような問答について、ディドロが書いた『百科全書』の項目「ソクラテス派」を参考に比較する。この項目はジャック・プルーストによれば1759年から1765年の間に書かれたと推定され、この期間は『ラモーの甥』執筆とも近いものである<sup>14</sup>。

---

<sup>10</sup> Voir Georges May, « L'Angoisse de l'échec et la genèse du *Neveu de Rameau* » in *Diderot Studies* III, Genève, Droz, 1961, pp. 285-307.

<sup>11</sup> Voir Raymond Trousson, « Diderot lecteur de Platon » in *Revue internationale de philosophie*, 148-149, 1984, pp. 79-90.

<sup>12</sup> この翻訳はエルマン版のディドロ全集の四巻に収録されている。また『ソクラテスの弁明』と『ラモーの甥』に現れる道徳を扱った論文として Mihaly Szivos, « Le rôle des motifs socratiques et platoniciens dans la structure et la genèse du *Neveu de Rameau* de Diderot » in *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, avril 1996, pp. 39-55 が挙げられる。

<sup>13</sup> Diderot, *Correspondance*, éd. Georges ROTH, Jean VARLOOT, Paris, Minuit, t. VI, p. 237.

<sup>14</sup> Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Paris, Albin Michel, 1995 (première édition 1962), p. 412.

このような形式的な類似だけでなく、概念的対立をも見出すことができる。徳という絶対的な価値を信奉するソクラテスに対して、ラモーには自然的欲求しかなかったのであり、道徳の側面においてソクラテスとラモーは対蹠的である。

それを確認するために、ディドロが書いた「ソクラテスの死」の草稿を検討したい。これは演劇を一般的に論じた作品であるディドロの『演劇論』に収録されているものである。演劇を論じる際の作品例としてディドロ自身が書いた「ソクラテスの死」の草稿がこの『演劇論』の中に挙げられているのである。かつ、『演劇論』の執筆が1758年なので『百科全書』の項目「ソクラテス派」の執筆期間とも近いのである。それは毒ニンジン飲もうとするソクラテスを、まだ日没にすらなっていないのだし、時間が早いのではないかと留めようとするクリトンに対して、ソクラテスが魂の不死を唱える場面であって、次のような台詞をディドロはソクラテスに言わせている。

クリトン　まだ山を太陽が照らしているではないか。

ソクラテス　生きることをやめることは全てを損失することだと、そうやって延期する人々は考える。私としては、生きることをやめると、得をすると考えている<sup>15</sup>。

これは魂の不死と法の遵守をソクラテスが唱えている場面である。ソクラテスによれば魂は不死であるから、肉体的に少し長く生きたとところで得をすることはないのである<sup>16</sup>。これはディドロにしてみれば、形而上学的な魂の理論から導き出された道徳観に基づく考えが表明されている発言である。それに対して、ラモーの死生観は完全に唯物論的であり、表現からみてもソクラテスの言い回しを意図的に転倒させていると考えられるほどである。ラモーにとっては物質的なものでなければ得を出来ないのであり、長く生きればその分だけ消費がかさんで損になる。そして死んでしまえばどんなに偉い人でも物質に還元されて、身分の違いなどなくなる。

彼　[……] 私はいくらかのものをためておきました。時間は流れました、そしていつも同じ分のものがたまります。

---

<sup>15</sup> *De la Poésie Dramatique*, DPV, t. X, p. 414.

<sup>16</sup> ディドロはソクラテスのこの発言をプラトンの『パイドン』から取っている。プラトン『パイドン』、岩波書店、1998、(岩田靖夫訳)、p. 173 参照。

私 あなたは失ったと言いたいのでしょうかね。

彼 いいえ、ちがいます、たまっているのです。人は各瞬間ごとに豊かになります。一日だけ生きるのが短ければ、一エキュ分の得です。それは全く同一なのです。重要な点は、気軽に、自由に、楽しく、たくさん、毎晩便所に行くことです。おお貴重な糞便！ あらゆる身分の人生にとっての偉大な結果がこれです。最後の瞬間には、全員が同等に豊かです<sup>17</sup>。

ラモーにとって生きることとは排泄をすることと同じであり、一日生きればその分だけ排泄物が蓄積される。ソクラテスにとっての時間と魂の議論は、ラモーにとっては時間と物質の議論に変わってしまう。「ソクラテスの死」と『ラモーの甥』からの引用したこのような文章を比較した研究はないが、ラモーの発言の中に「ソクラテスの死」の執筆の構想の影響が如実に表れていると考えられ、ラモーとソクラテスの関係を論じる上で重要なテーマを含んでいるとみなすことができる。

このような転倒は抽象性から具体性、普遍性から特殊性といった『ラモーの甥』全体にかかわる主題と密接に結びついていると言えるだろう。

もう一つ例を挙げる。『百科全書』の項目「ソクラテス派」でおそらくデイドロが最も感動しながら書いたのであろう箇所が、ソクラテスと息子との会話の場面である。ソクラテスの息子は悪辣な母クサンチッペに耐えかねて父に不平を洩らすのであるが、ソクラテスは母を敬うようにと息子を諭す。その会話の最後には、事典の項目であるのにもかかわらずデイドロが「私」«je»として登場し、感涙にむせぶ<sup>18</sup>。

「自分の母親を非難するとは！ 彼女はお前を妊娠し、腹に宿し、授乳し、面倒をみて、養い、習わせ、育て上げたのではないかな？ お前は彼女を多くの危難にさらしたのではないか？ お前は彼女に多くの苦痛、心配、気がかり、苦勞、苦痛をもたらしたのではないか？ […] ああ我が息子よ、悪辣なのはお前の母ではなく、お前ではないか！ 繰り返すが、不当なのはお前のほうだ…」  
なんという男！ なんという市民！ なんという首長！ なんという夫！ クサンチッペがこの弁護に値しなければいけないほど、ますますソクラテスに感服

<sup>17</sup> *Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, p. 96.

<sup>18</sup> このソクラテスの発言は、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』に書かれていることを要約したブルッカーの事典を参考として、デイドロが書いた記述である。クセノフォン『ソクラテスの思い出』、岩波書店、1974、(佐々木理訳)、pp. 77-82 参照。

しなければならない。ああソクラテス、私は君にはほとんど似ていないのだが、それでも君は私に敬服と喜びの涙を流させる<sup>19</sup>！

このように家族を敬うことを説くソクラテスに対して、ラモーにとっては家族という概念すらも空言である。伯父の大ラモーは家族など全く相手にしなかったし、ラモーは自分の妻を死ぬ前に娼婦のように働かせて稼げなかったことを悔やむ<sup>20</sup>。

家族という概念だけでなく、ラモーにとっては現実性のないものは全て空しいものとして捉えられる。本当に現実性があるのは自然的欲求だけなのである。

さあ、哲学万歳、ソロモン王の知恵万歳。良いブドウ酒を飲み、おいしい料理を腹いっぱい食べ、美しい女の上を転がりまわり、やわらかいベッドで寝る。それ以外、他のことは空しいのです<sup>21</sup>。

このラモーの発言にたいして哲学者は「祖国を守ること」、「友愛」、「社会的義務を果たす」、「子供の教育」などについて次々と尋ねるが、ラモーは全て「空しい」«vanité»と答えるのである<sup>22</sup>。

ソクラテスという名前は『ラモーの甥』の作品冒頭に出てくるだけで、あとはほとんど明示されることがないのであるが、ここまで論じてきたようにソクラテスとラモーの差異は常に強調されていると考えられる。ここで言うソクラテス、すなわち「ソクラテスの死」の草稿や、項目「ソクラテス派」に現れるソクラテス像は、一般に流布しているソクラテス像であった。しか

<sup>19</sup> L'article «SOCRATIQUE» de l'*Encyclopédie*, DPV, t. VIII, pp. 316-317.

<sup>20</sup> 「妻が小さな足で歩いているのを見る者は、彼女を追いかけに行きました。そして軽いスカートのおかげで形がわかる大きなお尻をみさだめながら、彼らは歩を速めていきます。妻は彼らを追いつかせます。それから突然彼らの方に黒く輝く瞳を投げかけ、彼らの歩みを急に止めてしまうのでした。メダルの表は裏の美観を損なわないのです。しかしなんとということか、妻を亡くしてしまいました。ひと財産築く望みは彼女とともに完全に消え果てたのです。そのためだけに彼女を娶ったというのに。私の計画は彼女に打ち明けてありました。あまりに賢かったので、彼女はその確実性を見誤ることはありませんでした。あまりに判断力に優れていたので、計画に賛成していました」 (*Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, pp. 194-195.)。

<sup>21</sup> *Le Neveu de Rameau*, DPV, t. XII, p. 114.

<sup>22</sup> 十八世紀のフランスでソロモンの言葉が唯物論やエピクロス主義と関連して使われることもあったという事情に関しては次の論文を参照。Jean Varloot, «Diderot et Salomon» in *Du baroque aux Lumières, pages à la mémoire de Jeanne Carriat*, Rougerie, 1986, pp. 130-133.

しデイドロにはデイドロ独自のソクラテス像というものが実は存在するのである。それをふまえてからラモーを再検討すべきであろう。

デイドロにとってソクラテスは、魂の不死やダイモンなどをまことしやかに語る形而上学者ではなく、デイドロが考える実験物理学の方法を体現した人物であった。合理主義的演繹によって科学体系を作るのではなく、実験によって帰納的に思考していく人物がソクラテスなのである。1753年（第二版1754年）の『自然の解釈についての断想』においてソクラテスについてデイドロは次のように書いている。

実験をすることに非常に慣れると、作業の最も粗野な労働者にすらも靈感の性質をもった予感を与える。彼らはソクラテスのように間違えて、それを親しいダイモンと呼ぶだけだろう。ソクラテスは人間を考慮することと状況を吟味するのに驚異的に習熟していたので、最も微妙な場合でも、彼の中では素早く正しい組み合わせがひそかに遂行され、予測がそれに続き、結果はそれからほとんど外れていなかったのだ<sup>23</sup>。

自然は人間の能力では捉え難いほど広大なので、膨大な事象の中から仮説を立てて法則を導き出すには、ソクラテスのような洞察力が必要なのである<sup>24</sup>。実験物理学とソクラテスは矛盾するどころか緊密に結びついている。このように自然科学的なソクラテス像をデイドロは持っていた。そしてそのようなソクラテスをもラモーは受け継いでいるのである。『ラモーの甥』では物理学について次のように書かれている。

彼 とにかく、人が全体を知らないとき、何も良くわからないものです。人は一方のものがどこへ行き、他方がどこから来るのか知りません。これとあれをどこに置くか、どっちが最初で、どっちが二番目にくるといいか。人は方法なしで良く示すことができますか？ そして方法はどこから生まれるのですか？ さあ、哲学者さん、私は物理学というのはいつまでも貧弱な科学だと頭の中で思っています。広大な海からの、針さきで取った水の一滴、アルプス山脈から取った砂粒です。そして現象の理由とは？ 実際のところ、少なく、悪く知っ

---

<sup>23</sup> *Pensées sur l'Interprétation de la Nature*, XXX, DPV, t. IX, pp. 47-48.

<sup>24</sup> このようなソクラテスの能力が実験物理学で必要とされることを、さきほど引用した『自然の解釈についての断想』の断想 XXX に続けて、断想 XXXII でデイドロは次のようにはっきりと書いている。「自然から実験物理学の真髄をつかみ、保持している人々が驚くべき程度でもって所有しているものが、非理性的の習慣である。多くの発見は、それらの夢想到起因している。これが生徒に教えるべき、一種の予言である、それが教えられるならばの話だが」（*Pensées sur l'Interprétation de la Nature*, XXXII, DPV, t. IX, p. 50.）。

ているのと、無知なのは同じようなものなのです。それはまさに伴奏と作曲の教師をしていたときの私のいた状態です。何を考えているのですか？

私 私は君の言ったことが確固としているよりも、もっともらしく見えるだけだと考えていたのだ。それは置いておこう。君が言うには、伴奏と作曲を教えていたのだね？

彼 そうです。

私 それらについて何も知らずに？

彼 何も。誓って。私よりもっと悪い奴がいるのはそのためです。何か知っていると思っ込んでいる人々です<sup>25</sup>。

ラモーが知っていることは、自然は広大なものであって、人間に知りえるのはそのごく一部であるということである。かつ自然は連続的なものであって、ある事象は別の事象の結果にも原因にもどちらにもなりうるので、どれを先とすればよいのか厳密には分かり得ない。よってラモーは自分の無知を自覚している<sup>26</sup>。だから演繹的に自然を理解できると思っている人間をラモーは嘲笑しているのである。このような唯物論的な個体と全体との連続的な結合という自然観のもとで、ラモーはそれを理解できないで何かを理解したつもりになっている者よりも自分の「無知の知」の優位を主張している。

このようにディオゲネスの道德観を引き継ぎながらも、行為においてはディオゲネスと齟齬をきたし、かつ、ソクラテスの道德との差異が強調されながらも、方法においてはソクラテス的な「無知の知」というソクラテスとの親和性をもラモーはあわせもっている。要するに、ラモーはディオゲネスともソクラテスとも、かつ離れ、かつ結びつくような関係にある。このような転倒が起こる原因は何であろうか。

## 物質と人間

ここまでの議論を再検討すると、ラモーがディオゲネスに近づくときもソクラテスに近づくときも、その背景にあるのがラモーの自然観であることは

---

<sup>25</sup> *Le Neveu de Rameau*. DPV, t. XII, p. 104.

<sup>26</sup> このようなラモーによる無知の自覚の告白は『ラモーの甥』の中にたびたび現れている。

明らかである。そしてその自然観はニュートン科学革命の十八世紀を生きたディドロの自然観が大いに反映されてもいるだろう。ディドロの唯物論的な自然観を敷衍することにより、『ラモーの甥』にみられるディオゲネスとソクラテスのさらなる考察を進める。

1758年の『演劇論』の中で、演劇によって描くべき人間をディドロは唯物論的に規定している。そこでは次のように万物流転と分子という考えによってディドロは人間を捉えている。

ひとりの人間の中でも、全ては永遠の有為転変の内にある、人間を物理的に考えた場合でも、精神的に考えた場合でも。 […] 今の私の年齢では、生まれた時に持っていた体の分子は一つも残っていないだろう。私の人生の終局がいつに定められているのか知らないが、この体を土に返す時がやってきたときに、この体が今持っている分子は一つも残っていないだろう<sup>27</sup>。

ここで言われているように、ディドロにとっては物理的にも精神的にもあらゆるものが変化の内にある。しかし、「精神的」という言葉は唯物論者にとって何を意味するのだろうか。ディドロは続けて説明しているように、精神的な変化をも物質的な原因、すなわち「分子」に代表させて変化の原因を論じている。

このような「分子」という原因によって精神的なものも規定されてしまうとすれば、ディオゲネスやソクラテスのような古代の哲学者が考えた道徳とは必然的に齟齬をきたさざるをえない。しかもラモーの持つ分子は「呪われた分子」である。そのためラモーがいかにディオゲネスのように生きようとも、ラモーの分子はディオゲネスとは異なった方向にラモーを導く。ラモーの分子は親から受け継いだ「呪われた分子」によっておべっか使いとならざるを得ないようにラモーを規定してしまっている。

私の父の血は、私の伯父の血と同じです。私の血は、私の父の血と同じです。父親の分子は堅くて鈍かったのです。そしてその最初の呪われた分子が残りの全ての分子を同化してしまったのです<sup>28</sup>。

自己の存在のありかたについて、このような物質的原因を用いて語ることはラモーの大きな特徴である。ディオゲネス、ソクラテスとラモーとの差異

---

<sup>27</sup> *De la Poésie Dramatique*, DPV, t. X, p. 423.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 172.

を把握するにあたって、このような分子という原因は、唯一とは言えないまでも一つの主要な原因と言えるであろう。

## 結論

ディオゲネスとソクラテスを通じて浮き彫りとなる『ラモーの甥』の重要な主題を論じてきた。実践を旨としたディオゲネスを引き合いに出しながらも、その実践がラモーではおべっか使いというディオゲネスが嫌悪するものへ向かい、かつディオゲネスのテーマは『ラモーの甥』の作品内でラモーと哲学者「私」の立場でねじれをきたしていた。ソクラテスは永遠不変の魂を説いていたが、ラモーは唯物論的な個物に魂を置きかえ、抽象的な魂の概念を廃棄しながらも、唯物論的な自然観のもとでソクラテス的な「無知の知」を表明してもいた。『ラモーの甥』に現れるこれらの主題は唯物論から道徳などの他の主題へと多層的に結びついてゆくはずであり、さらなる考察を必要とするだろう。